

何故俺は銀髪オッドアイに転生しなかった！

言寺速人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生物でよく見かける銀髪オツドアイ。時には厨二的かませキャラとして扱われる  
その存在に心の底からなりたいと思う転生者がいた。一体なぜそのようにしてそのよ  
うな願望を抱いたのか。

目

次

何故俺は銀髪オツドアイに転生しなかつ

た！

1



# 何故俺は銀髪オツドアイに転生しなかつた！

さて

もしも今俺が過ごしている日常を観測する神の目視点、いわゆる読者と呼べる存在がいるのならばある程度の自己紹介をしなければならないだろう。

まあ一言で言うと俺は転生者である。

……今この三文字を見て「んだよ、また銀髪オツドアイ最低系転生者かよ」と思った読者よ。残念ながら俺の容姿は黒髪に焦げ茶の目の一般容姿である。

なぜかつて？ 神様に願わなかつたからだよ！

そのせいでこんな苦労をすることは思わなかつたわ！

ん？ まずいな。どうも感情が先走つてうまく説明できていない。

いつたん深呼吸をさせてほしい。……ふう、落ち着いた。

申し訳ない、どうも普段のストレスがあふれてきてしまつたようだ。

そもそもなぜ俺は転生などしたのか、そこから話をするとしよう。

## 2 何故俺は銀髪オッドアイに転生しなかった！

気がつけば俺は河原に立っていた。

もしも1人だけでそこに立たされたならば混乱と心細さでどうにかなってしまったかもしけないが実際は異なる。

何故なら見渡す限り人、人、人。

た。

朝の通勤ラッシュなど目ではない位にぎゅうぎゅうのおしくらまんじゅう状態だった。

かりだ。

正直考える内容など「(押し付けられて)痛い！」や「(押し付けられて)苦しい！」ばかりだ。

何が起こつたのかも分からぬまま、ただ流れに乗つて動いているうちによく狀況がつかめてきた。

まずここはいわゆる賽ノ河原と呼ばれる場所でここにいる俺達は全員死んでるらしい。

流石に全員死んでいると聞かされて耳を疑う。ちょっと見渡しただけでも軽く数百

は超えている。

列の先など全く見えないし最後尾もまたしかりだ。

一体何が起こつたのかと良く聞いていると未曾有の大災害、だつたらしい。

確証が持てないのは俺にその時の記憶がないからだ。

ただその災害規模は隕石が上空からおちてきたようなものを想像してくださいとさつきから頻繁に同じことを話している案内人の方に言われた。

それもう答えじやねえの？ と思わなくもなかつたが聞いたところでどうにかなる物でもなかつたのでそのまま列に並び続けた。

あちこちで、痛て、おい踏むな！ とか ちょっとキツ！ とか 誰だ今俺のケツ撫でたの!? 文句の応酬で他の皆さん死んだこと云々より今のこのラッショをどうにか抜けたいという思考の方が強いようだつた。

押されながらも出来る限り回りを見てみるが家族や親友の姿は見当たらない。1人暮らしで地方に勤めていたからせめて田舎にすむ家族達が無事であればいいなと妙に達観しながら三途の川の渡し船の順番を待ち続けた。

長かつた……。

ここでは昼も夜もなく死んでるからお腹も減らないし眠くもならないからそういう意味では助かつたけど時間の経過が分かりづらいのは本当に辛かつた。時計でもあればよかつたのだけれど死んだ所為か服装も左前の死に装束に変わつて

いたので確認のしようもなかつた。

体感的には何日も待たされ——実際には何時間かあるいは何十日だつたかもしけないが——ようやく船に乗る事が出来た。

乗りこんだ船の船頭は一体何度も往復したのか分からぬが今にも倒れそうなほどげつそりしていた。

疲れ切つた漕ぎ方があまりにも不安だつたので「手伝いましょうか?」と伺うと泣いて喜ばれた。正直その泣きっぷりに少し引いたが。

漕ぎ方を教えてもらいながらここでも色々話を聞かせてもらつたが今回はあまりにも死者が多くこちらでも手が回らないらしい。

本来ならば川を渡る前に六門銭をもらい、払えなければ衣服を剥ぐ、と言つた流れがあるらしいのだがそんな事を1人1人やつていてはいつまで経つても終わらないため今回は確認なしで定員ギリギリまで船に乗せているがそれでもオーバーペースとのこと。

「気遣つてくれる人はたまにいたけど何回言つても嬉しいもんだ。あんたが天国へいけるのを願つてるよ」と船を降りた時の船頭の哀愁漂うヴォイスは忘れられない。

さて、やつとの思いで対岸に渡つたは良いがまだ終わりではなかつた。

川を渡つてゐる最中にも予測はついていたがここから閻魔大王のいる所までは遙か遠い。

だがその道もやはり人、人、人！ コミ〇もなんのな長蛇の列！  
正直うんざりする。

回りの人達も精神的に來ているのか口数が減つてきている。  
そうやつて再び並んでどれだけつたか。

急に進行が遅くなりやがて動かなくなる。

何が起こつたのか？ とざわざわ騒ぎだしてからしばらくして「えー、審判待ちの皆様方ー」と氣の抜ける声が上空から聞こえてくる。

「大変申し訳ありませんがあまりの死者の数の所為で天国も地獄も魂の容量オーバーとなりました。よつて今並んでいる皆様はどちらにも行く事が出来ません」

一瞬の静寂。続く罵詈雑言。

まあ当然だろう。あれだけ待たされてどちらへも行けないとはどうしろというのだ。  
かくいう俺もその1人である。

フザケンナ！ どうしろつてんだ！ だからさつきから俺のケツ触つてんのだれだよ!?

因みに最後のセリフが俺のだ。

## 6 何故俺は銀髪オッドアイに転生しなかった！

「あわわ、お、落ちついて、落ちついてください！ 代わりに皆様には天国地獄に空きが出るまでちょっと他の世界に行つてもらいます！ 本来ならば徳の高い人間用なのですが今回はこちらの都合と言う事で前世の記憶ありなど特典を付けますので！」

再び一瞬の静寂。続く拍手喝采。

いや、あんたら現金すぎだろ、と思わなくもなかつた。しかしそんなことより家族の安否の方が気にかかるつてしまふがなかつたのだ。  
とは言え

「なお転生が嫌だと言う方は申し訳ありませんが魂の行き場がないので消滅してもらう事になります。わたくしどもも無暗矢鱈と循環すべき魂を消したくはありませんのでどうかご理解いただけますようお願いします」

最初から俺達に拒否権などは無かつたのだが。

こうして俺を含めた数多の魂が転生を行う事になつた。

その際、転生のために会つた閻魔さまの疲労っぷりは船頭の比ではなかつたことをここに記しておく。

さて、こうして俺が転生をしたと言う事は分かつてもらえたとは思うがここで問題が起きた。

それはどういう世界に転生するか、と言う事だ。

俺は特に希望が無かつたので閻魔様の進める世界にそのまま転生したのだが生まれ変わつてしまらしくしてここがある創作物の世界だと気付いた。

元はギャルゲーとして有名だったが萌えの他に燃えの要素も取り込まれた学園ファンタジーだった。

魅力的なキャラクターに多数のヒロイン。深い世界設定にやり込み要素も加えられたそのゲームはただギャルゲーとしては終わらずファンディスク、書籍化、格闘ゲーム、アニメ、と様々なジャンルで広まつていった。

俺自身、アニメを見てその戦闘やらヒロインたちの可愛らしさにはまつた性質だまさか自分がその世界に入るとは思わなんだ。

ところでこのゲーム、圧倒的人気を誇るもののはうだけユーザーから不満の声を浴びている点がある。

ソレはなんというかこの手の物には良くある？主人公である。

インターネットの大型掲示板にて「〇〇は俺の嫁」「いや俺のだから」「え？ 〇〇なら今俺の隣で寝てるよ？」と盛り上がりしている時に「いやあの子は剣の嫁だから」と書こうものならばすぐさま「死ね！」「死ね！ 氏ねじやなくて死ね！」「何でアイツモテんのか未だに分かんない」「グラフィックもいい。ストーリーもサウンドもいい。ヒロインは可愛いし面白い。けどアイツの所為で全部台無し」などと誹謗中傷がズラリと並

ぶ。

主人公「剣 明(つるぎ あきら)」がここまで嫌われるのは当然ヒロインたちと結ばれるという嫉妬的な感情もあるのだろうが主な要因はテンプレすぎるほどの鈍感性とラツキースケベだろう。

頬染めてヒロインが「一緒にいて」とか言つてんだから気付けよ。風邪で心細いんだなとか言つてんじやねえよ

毎朝起こしに来る幼馴染に「腐れ縁だ」で済ますなよ！

何で転んで相手とキスしてんだよ。歯が当たるだろ！

風呂場に先にヒロインが入つてゐるのに気付かなかつた？ 嘘言つてんじやねえよ。絶対脱いだ服置いてあるだろうし電気もついてんだろうし物音もするだろうが！ と、例を上げればすぐにこのくらい上がる。

この点に関しては俺も同感であるし見ててたまに殴りたい衝動にかられることもある。

そう、『見てて』だ。

「なあ、さつきから何ぶつぶつ言つてんだシンヤ？」

「別に。というか何でお前は人の妹が起こしに行つたのに俺と同じ時間に登校してるんだアキラ？」

「いや、今日は俺たちはクラス発表見ていけばいいだけだし。眠かつたから先行つていよいよつて言つたら文句言いながらでかけてつたぞ？」

「この鈍感野郎。人の妹を誑かしやがつて」

「やめろよ人聞きの悪い。俺にとつても美矢ちゃんは妹のようなもんだよ。美矢ちゃんだつて俺の事を明おにいちゃんつて呼ぶし」

「俺は最近呼び捨てだぞ？　あとお前が兄弟とか死んでもやだ」

「俺もお前と兄弟はやだな」

苦笑混じりで同意を示すのは赤毛に若干の釣り目、しかしだからこそ笑顔のギャップに定評のある我らが主人公、イケメンの剣明君16歳。

そして俺は何故かその了の幼馴染となつた広井　真矢として生を受けここにいる。

因みに先ほど話しに出てきた美矢というのは原作にて剣の隣人にて妹ポジションを持つヒロインの1人である。

昔は俺の事もお兄ちゃんお兄ちゃんとついてくる可愛い妹だつたが最近は「は？」  
に血のつながつた兄なんていませんけど？」とか素で言うから俺涙目である。  
まあそれはいい。いやよくは無いが俺を悩ませている心労はこれではない。

ため息をつきつつもいつの間にか到着していた我が高校、そして張り出されているクラス分けの掲示板。

「お！ やつたなシンヤ！ また一緒だな」

「うん分かつてた。最早呪いの類だと言う事は分かつてた」

僅かな期待もあつたのだが幼稚園の頃から全て同じクラスという作為的な運命からは逃れる事が出来ず晴れて連続記録達成である。

どうせ他のクラスになつたところで“クラスメイトは皆同じ”なのだろうから大して変わりはしないのだろうがやるせないものはやるせない。

行こうぜ、と嬉しそうに2年の教室へ向かっていく明の後ろをいやいやながらもついていく。

2-Aと書かれたありふれた教室。ここが今年の俺の教室であり本格的に原作が進む舞台のスタート地点。

ガラリ、と明が空けた先には既に他のクラスメイト達が座っている。

そこには予想していた通りのあり得ない風景。

銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪オッドアイ銀髪

右を見ても銀髪オツドアイ。左を見ても銀髪オツドアイ。

教室の端から端までみーんな銀髪オツドアイのイケメン達！

それらが一斉にこちらを見やる。ホラーカ。

そう、これが俺の胃を悩ませる最大の原因。

この学校、主要な原作キヤラ以外みーんな転生者だった。

ただそれだけだつたらまだ俺もここまで辛くは無かつた。だが主人公とヒロイン勢と敵以外全員銀髪オツドアイつてなんだよ！

普通銀髪オツドアイつてあり得ない容姿だからこそその特異点だろうにほぼ全員じやあむしろ没個性になつちやつてんじやん！

各学年合わせて15クラスだけどそのうち11クラスは全員銀髪オツドアイ。だからホラーカ！

学校側も疑問に思えよ！ それともこの学校は銀髪オツドアイなら無条件で受かる制度もあるのか？

だつたら男女比が99：1（ヒロイン達）レベルなのも納得だね！（ヤケクソ）

現実逃避ぎみに学校関係者に呪詛を放つていると彼らが皆視線に1つの感情を乗せ

## 12 何故俺は銀髪オッドアイに転生しなかった！

て “俺達”を見る。

その感情とはすばり敵意。  
さて、ここで問題だ。

ギャルゲーの主人公である「剣 明」が睨まれるのは先に話したように彼らが明を蛇  
蝎のごとく嫌っているからだ。ではなぜ俺も睨まれているのか？

想像してみてほしい。

30人近くいるクラス。ほぼ銀髪の中にぽつりとある赤毛（主人公）と桃髪（メイン  
ヒロイン）と黒髪（俺）

文字で表すと

銀銀銀銀銀銀  
銀銀黑赤桃銀  
銀銀銀銀銀銀  
銀銀銀銀銀銀  
銀銀銀銀銀銀

違和感。圧倒的違和感。誰がどう見たって浮いている。

そしてほぼ全生徒が銀髪なこの学校で原作キャラでもないのに黒髪な俺を転生者な周囲はどう思うか？

答えは簡単。

『こいつ、転生者だな！ 原作キャラを狙つてやがる！』

一言だけ言わせてくれ。

お前らにだけは言われたくない。

ひしひしと感じる刺すような視線に耐えながら何が嬉しいのか俺に話しかけてくる明におざなりな返事を返しつつもこう思わずにはいられない。

何故俺は銀髪オツドアイに転生しなかつた！